

ワグナーの楽劇と19世紀の哲学 (続き)

大熊 治生

倉敷芸術科学大学芸術学部

(1997年9月30日 受理)

III. iii. 「ニーベルングの指輪」と「指輪物語」

我々はここでワグナーの『ニーベルングの指輪』を見て行く前に、「指輪」を巡って書かれたもうひとつの冒険物語、即ちイギリスの英語学者トールキンの書いた『指輪物語 The Lord of the Rings』を見ておきたいと思う。『指輪物語』が書かれたのは1936年から1949年の間であるからワグナーの『指輪』の成立から1世紀近く経っている。両者は直接の関係はないものの、共に北欧神話・伝説に取材しており、「指輪」の神秘的な力をテーマとしている。両者はともに、『エッダ』や『サガ』に取材しているので、登場人物や場面設定など類似点が多いが、ワグナーの『指輪』は指輪を巡って繰り広げられる権力と愛の物語であるのに対して、トールキンの『指輪物語』は指輪を巡るファンタジー風の冒険物語である。

トールキンは1892年に生まれている。1922年には最初の主要学術論文『中世英語語彙』を書き、1925年にはオクスフォード大学の教授に就任、英語学、文献学の学者として多くの業績を残した。1959年に退官、1974年に没している。その一生はむしろ堅実な学者としてのものだったと言えるだろう。だから作家としての仕事は趣味的な面が強いとはいえ、本業の英語学や文献学の知識がおおいに役立ったことは言うまでもなからう。トールキンが『指輪物語』を書きはじめたのは1936年、44才のときであり、それから13年間にわたってこの物語を書き継いでいった。

トールキンは『指輪物語』を書くのに先立って、『ホビットの冒険』という童話風の冒険物語を書いていた。これは1935年頃から子供向けに書かれたもので『指輪物語』の序章といえるものであり、登場人物や状況の設定が行なわれている。この物語の舞台は「中つ国」(原語はmiddle earth)と呼ばれている。これは前に見たような北欧神話の「ミッド・ガルド」という言葉からとられたものであろう。それは北欧神話で、神々の住む天の国と死者の国との「中間の世界」という意味で、人間の住むこの世を表している。(「中つ国」という訳語は評論社版『指輪物語』瀬田貞二訳による。)ワグナーの『指輪』においても、アルベリッヒたち小人の住む地下の国と、神々の住むワルハラ城との中間に人間たちが住んでいた。『ラインの黄金』で登場したアルベリッヒやミーメという小人たちは神々や人間たちの「影の部分」になっていたが、トールキンの小人たちは主役であり、しかもドワーフ族、エルフ族、ホビット族等々十数種類もの種族が登場する。その中のひとつ、ホビット族のフロドという人物を中心に、小人、

人間、妖精、魔法使いなど、様々な種類の登場人物が指輪を巡って争奪戦を繰り広げる。

物語りのモチーフは、ディテールの複雑さとは反対にむしろ単純である。「中つ国」の東の方から勃興した邪悪な「黒い力」が「指輪」を手に入れて世界を支配しようとするのに対し、「善」を目指す「白い会議」がその指輪を奪って破壊し、「黒い力」を駆逐して正義を実現するというものである。「指輪」のもつ力はワグナーのそれと大体共通している。「指輪」はそれを持つものに世界支配の力を与えると同時に、持つものを破滅へと導くというものであるが、ただ、トルキンの指輪は「隠れ兜」―即ちそれを身につけるものの姿を隠してしまう力をも併せ持っている。そしてそれを持つ者を狂わせて邪悪な道に引き込む力のはるかに強い。この指輪は大昔にサウロンという、偉大で邪悪な王が創ったもので幾多の戦争と偶然によって、ホビット族のフロドという小人に拾われていた。サウロンは戦争で死に、「黒い力」は一時は弱まったものの、再び勢力を盛り返していた。彼らはホビット族に指輪がわたっているのを知って、それを奪い返し、世界を支配しようと企んでいた。一方ホビット族も、その指輪を持っているだけで自己の心の中に邪悪な力が勢力を得てくるのであるから、一刻も早くこの指輪を破壊しなければならない。しかしこの指輪は、それが創られたサウロンの故郷、即ち黒い力が興った更に東の方にある火山の火口に投げ込む以外に破壊する方法はなかった。そこでフロドとその仲間が指輪を持って東の国へ危険な旅をすることになるのである。これが物語の第一部『旅の仲間』の発端であり、物語はその後、第二部『二つの塔』第三部『王の帰還』と続き、フロドたちの冒険によって、最後に「白い会議」の目的が達せられて、世界に平和が戻るのである。

ここではこれ以上、この膨大な物語の粗筋をなぞって行く必要はないであろう。この物語と『エッダ』『サガ』、そしてワグナーの『指輪』との関連や類似点はワグナーの『指輪』の物語が進んで行くにつれて数多く現われてくるのでその都度指摘することにしたい。

III. iv. 第一夜 ワルキューレ

前にも見たように、ワルキューレというのは北欧神話に登場する戦いの乙女たちの名前である。彼女たちは神々の国アスガルドで主神オーディンに仕え、また俊足の馬に乗って空を駆け、勇敢な戦死者たちをアスガルドに運んでくる。また白鳥の姿をして空を飛ぶこともある。ワグナーの『指輪』ではワルキューレはヴォータンの子供になっている。

ヴォータンは神々の世界の前途に漠然とした不安を持っていて、常に知の女神エルダに相談していた。そしてヴォータンとエルダの間に生まれたのが9人のワルキューレたちだったのである。(この間の事情は第二夜の「ジークフリート」の中で明らかにされる。)しかし、ヴォータンはそれだけでは満足せず、神々の世界を守るために人間の女との間に「英雄の人間」を作り出そうとした。それは神々からは独立な自由な人格でありながら、世界を統一し、神々の世界を守ることのできる英雄なのである。そしてそれが「ヴェルズング」の一族であり、その中の英雄的な若者がジークムントであり、その双子の妹がジークリンデであった。そして人間の

世界に生まれたヴェルズングの兄妹は周辺の部族との戦いの間に離れ離れになってしまった。

(このようなワグナーの場面設定は矛盾に満ちたものであり、そのため、様々な解釈が可能である。)

ワルキューレ第一幕はジークムントが他の部族との戦いの中で難を逃れ、偶然にも敵の部族の頭領フンディングの屋敷に辿りついたところから始まる。フンディングの屋敷には、すでに幼い頃離れ離れになった妹ジークリンデが略奪婚の結果、妻となって暮らしていた。嵐の中を逃げ込んで来たジークムントに対して、ジークリンデは彼が誰であるかも知らぬまま、食物と休息の場を与えようとする。そこへフンディングが帰館し、ジークムントに何者かと問い質す。ジークムントは偽名を使って自己の出自を語るが、フンディングにはすぐに彼が敵対する部族の子供であることが分かってしまう。フンディングは掟によって明朝の決闘を約束して部屋に戻るが、ジークリンデは彼の寝酒に眠り薬を入れて眠らせ、深夜独りでジークムントに会いに来る。そこで二人は互いの身の上を語り合い、同じ父から生まれた兄妹であることを知り、愛し合う。

フンディングの家の中央には古代ドイツの習慣にならって、巨大なトネリコの樹が植えてあり、それを柱として家が造られている。すでにヴォータンはジークムントがこの家に現われる前にフンディングと決闘することを予期して、ジークムントに武器を与えるために、変装してこの家のトネリコの樹の幹に武器として霊剣「ノートゥング」を突き刺して行った。(変装というのは幅の広い帽子をかぶり長いマントを着るという北欧神話のオーディンの姿である。) この霊剣は剛勇無双の英雄のみが樹から引き抜いて、自分のものとするのであった。ジークムントは樹の幹から霊剣を抜き取り、ジークリンデと共にフンディングの館を脱出する。

第二幕。ヴォータンはジークムントに決闘で勝利を収めさせるように、ブリュンヒルデに命じる。ブリュンヒルデはワルキューレの中でもヴォータンが最も愛している戦士である。しかし、そこにヴォータンの正妻フリッカが現われる。フリッカはこの計画に対して、激しい憎悪をたぎらせ、ジークムントを殺してしまうよう、ヴォータンに迫る。フリッカにとっては、ジークムントやジークリンデはヴォータンが正妻であるフリッカを差し置いて、人間の女に産ませた子供であり、おまけに兄妹で愛し合うなどとは我慢がならないというのである。(この部分は神々の世界の出来事と人間界の家庭の話が同時に登場して、神々の人間的な側面が描かれる。ここでも様々な解釈が可能であろう。) ヴォータンは嫌々ながらもフリッカの要求を飲まざるを得なかった。そして自らが生み出した自由な英雄、ジークムントの命を奪うことに同意するのである。というのも、神々の世界は掟と契約によって作られた世界であるので、約束を破った者の力は衰えてしまうからなのである。ヴォータンは前言を翻して、ブリュンヒルデにジークムントを助けるのではなく、命を奪うように命令する。それまでブリュンヒルデは、父であり、神々の王であるヴォータンの意志に忠実に、父の命じるままに、父の愛する者を愛して来たのであるが、突然父の意志が変わってしまったことに衝撃を受け、父の心変わりに反

抗するが、ヴォータンは命令に逆らうことを許さず、ブリュンヒルデをジークムントとジークリンデのところに向かわせる。

深い山中に逃れた二人にフンディングの追っ手が迫っている。ブリュンヒルデは空飛ぶ馬に乗ってジークリンデに追い付き、彼に逃られぬ死と別離が迫っていることを告げる。しかしジークムントはジークリンデとの永遠の愛をあきらめることはできない。ブリュンヒルデは二人の愛に心を動かされ、ヴォータンに逆らっても、ジークムントを助けようと決意する。そこにフンディングが追い付き、ジークムントとの決闘が始まる。ブリュンヒルデは目に見えぬ盾によってジークムントを護り、霊剣ノットゥングによってフンディングを倒すようにするが、突然そこに現われたヴォータンは、ジークムントの持った剣を打ち砕き、ジークムントはフンディングに刺されて絶命する。そして、そのフンディングもヴォータンによって殺されてしまう。一方ブリュンヒルデは悲しみにくれるジークリンデを馬に乗せてワルキューレの岩山へ逃れて行く。ヴォータンは怒りに燃えて、自分を裏切った娘を追っていく。

第三幕。ブリュンヒルデはジークリンデを連れて、ワルキューレたちが集まっている岩山にやって来る。ワルキューレたちはブリュンヒルデがヴォータンにそむいて人間の女を助けようとするのに驚き、ブリュンヒルデの助けを求める哀願にも尻込みしてしまう。ジークリンデもあきらめて、ジークムントと共に自分も死にたいと言うが、ブリュンヒルデはジークリンデがすでにジークムントの子供を身籠もっていることを告げ、子供を守るためにニーベルングたちの住む東の方の森へ逃げ、そこで子供を育てるようにと促し、ジークムントの持っていた霊剣ノットゥングの破片を渡した。ニーベルングの森はヴォータンも近付きたがらないのである。

ヴォータンはすぐにワルキューレたちの岩山にやって来た。父であり、神々の支配者であるヴォータンを裏切った娘を罰するためである。ブリュンヒルデは自分の行動が本質的には反逆ではなく、父の気持ちにも背いていないと主張しつつ、許しを乞うが、ヴォータンは聞き入れず、罰を与える。それは一切の神的能力を奪った上で、岩山の頂で永い眠りにつかせる、というものである。ブリュンヒルデはこれに対し、最後の譲歩を求める。それはブリュンヒルデが眠る岩山を炎で囲み、それを乗り越えて来る程の勇敢な英雄のみが彼女を眠りから目覚めさせることができるようにするというものである。ヴォータンはこれを受け入れ、ブリュンヒルデの目に接吻し永い眠りにつかせる。ヴォータンは火の神ローゲを呼んでブリュンヒルデの眠る岩山を炎で囲み、悲しみの中を去っていく。

Ⅲ. v. 第二夜 ジークフリート

ジークリンデはジークムントの子供を産むと、まもなく死んでしまう。ジークムントの子供はジークフリートと名付けられた。彼は両親を知らぬまま、ニーベルング族のアルベリッヒの弟ミーメに育てられ、恐れを知らぬ英雄として成長していった。

第一幕。第一場の舞台は深い森の中である。その森の奥深いところでは指輪を奪った巨人族の一人ファフナーが大蛇に姿を変えて指輪を守っている。この森の入り口には自然の岩石で

きた溶鉱炉と鉄床があり、ミーメがそこで剣を鍛えている。ミーメの目的はその剣でジークフリートにファフナーを殺させ、ニーベルングの宝を奪い返そうというのである。しかし、ミーメが何度剣を鍛えても、ジークフリートには玩具のようなもので、すぐ折れてしまう。ジークフリートにとっては霊剣ノートゥングの破片を溶かして鍛え直したものしか役に立たないのである。そのうえジークフリートは、彼を育てたミーメが、顔つきも体付きも性格も全く彼に似ていないのでミーメを親とは思っていなかった。ジークフリートは森から大きな熊を連れてきてミーメにけしかけてからかい、ミーメの剣は役に立たないと言って非難する。更にジークフリートは自分の両親は誰なのかと、ミーメに問い質し、力づくで彼を脅かして白状させる。ミーメは恐ろしがって、ジークフリートとその子供の話を話すと、今度はその証拠となるものはないかと迫る。ミーメは砕けたノートゥングの破片を取り出すと、ジークフリートは喜んで、それを鍛え直せとミーメに命じて飛び出していく。しかしミーメはその霊剣を鍛え直すことなど到底できないと絶望してしまう。(ここでのジークフリートとミーメの関係は育ての親と、その子の関係としては非現実的であろう。更に第三幕になると、ミーメはジークフリートの霊剣ノートゥングによって倒されてしまう。このような粗筋の問題点については後に論じたいと思う。)

第二場はヴォータンとミーメの対話の場面である。ヴォータンは大きな幅の広い帽子をかぶり、長い青色のマントを着、手には槍を持ってミーメの前に現われる。彼は「さすらい人」と呼ばれている。ヴォータンは次第に炉端に近付いて、休息させてもらう代わりにミーメの三つの質問に答えようと言う。答えられなければ首をやってもいいという。そして答えられれば今度は反対にミーメに三つの質問をし、答えられなければ首をもらうぞ、といって賭けをするのである。そしてミーメの出した三つの問いは、地下の国の種族の名前、地上の国の種族の名前、天上の国の種族の名前はそれぞれ何か、というものであった。ヴォータンは簡単にその問いに答え、次にミーメに三つの問いを与える。それはヴォータンが最も愛していた種族の名前、ジークフリートの使う剣の名前、更にその剣を鍛え直すことのできる者の名前である。しかしミーメは最初の二つの問いには答えたものの、第三の問いには答えられず、ミーメはヴォータンに首を差し出さなければならなくなる。ヴォータンはミーメの命は恐れを知らぬ英雄に預けると言って去っていく。

第三場。ミーメは森の奥から不気味な音がするので、大蛇に変身したファフナーが襲って来たのかと思って恐怖にとらわれていると、森の中からジークフリートが飛び出して来る。ジークフリートはミーメが霊剣を鍛え終ったかと尋ねるが、ミーメには鍛えることができないので、あいまいな言葉で誤魔化している。更に詰め寄るジークフリートにミーメは、どんなに強い人間も恐怖を知らなければならない、と言って大蛇ファフナーの恐ろしさを語り始める。ジークフリートはその大蛇を退治するためにも霊剣が必要なのだと行って、ミーメの止めるのも聞かず、今度は自分で霊剣を鍛えはじめる。ミーメはジークフリートが自ら鍛えた剣でファフナーを倒し、ニーベルングの宝を手に入れることを確信した。そしてジークフリートがニー

ベルングの宝を手に入れたら、今度はミーメが彼を毒殺してその宝を手に入れようと企み、その薬を作り始める。一方、ジークフリートは自ら鍛えあげた霊剣ノートゥングを振るって鉄床に打ち下ろすと、鉄床は真二つに割れる。

第二幕はジークフリートが大蛇ファフナーを退治する場面である。第一場。大蛇ファフナーの潜む「欲望の洞窟」の入り口ではニーベルング族のアルベリッヒが中の様子を窺いながら物思いにふけっていると、そこにヴォータンが広いつばの帽子をかぶり青く大きなマントに身を包んで現われる。ヴォータンはここでは「さすらい人」と呼ばれている。アルベリッヒはこのさすらい人がヴォータンであることをすぐ見破り、以前だまされて指輪と宝を奪われた恨みを爆発させる。アルベリッヒはヴォータンが自分の作り出した英雄に指輪を奪わせようとしているのを嘲笑する。しかしヴォータンはアルベリッヒこそ自分の弟のミーメに指輪を横取りされないように気を付けろと言う。ヴォータンはファフナーにも、命のあるうちに宝を出すようにと警告し、同じようにアルベリッヒも、宝を出せばファフナーの代わりにジークフリートと戦ってやろうと持ちかけるが、ファフナーは全く相手にしない。ヴォータンは去り、アルベリッヒは残される。

第二場。夜明けと共に、ミーメがジークフリートを連れてくる。ミーメは大蛇ファフナーの恐ろしさや残忍さについて語るが、ジークフリートは全く意に介さず、反対にミーメを脅しつけて追い払う。ジークフリートはミーメが自分の親でないなら、自分の親はどんな人だったのかと考えるが、教えてくれる者もない。小鳥にでも聞いてみよう、と、葦笛を吹くがうまくいかないので投げ出してしまふ。今度は自分の持っていた銀の角笛を吹くとその音を聞いてファフナーが目をさまし、洞窟から出てきて、ジークフリートと対決するが、ジークフリートの霊剣ノートゥングで心臓を突きさされ、その場に倒れる。ファフナーはジークフリートにこれまでの経緯を語って死ぬ。ジークフリートが霊剣を大蛇の心臓から引き抜くと、その血は火傷するほど熱いので、思わず口に手を入れた瞬間、彼は小鳥のうたう言葉を理解するようになる。小鳥はジークフリートに指輪と隠れ兜のことを教えると、彼はそれに感謝して洞窟の中に入っていく。

第三場。ミーメが登場し、大蛇が死んだことを見届け、注意深く洞窟に入ろうとすると、アルベリッヒが登場し、行く手を遮る。二人の兄弟がその宝の分け前で言い争っていると、ジークフリートが指輪と隠れ兜を持って出てくる。ミーメはそれを見て、毒薬を取りに行き、アルベリッヒは奥へ隠れる。ジークフリートは小鳥の言葉によってミーメの企みを知っているの、ミーメが毒薬を持ってきて飲めとすすめるのにも見向きもせず、霊剣でミーメを切り倒す。アルベリッヒはそれを見て、岩の影から笑っている。ジークフリートはミーメの死体を洞窟に投げ入れ、大蛇で洞窟の入り口をふさぎ、ニーベルングの宝を封印してしまう。ジークフリートはミーメを葬ってしまったので、家族や仲間が一人もいなくなった。そこで小鳥に仲間となる者はいないか、と尋ねると、小鳥は炎の中で眠っているブリュンヒルデを目覚めさせれば、彼女を妻とすることができると教える。ジークフリートは小鳥の案内で、ブリュンヒルデ

の岩山へと向かっていく。

第三幕はブリュンヒルデの目覚めの場面であるが、その前にヴォータンと智の女神エルダとの対話があり、神々の暗い運命を暗示する。第一場は岩山の山麓の荒野。嵐と雷雨が神々の運命を暗示する。ヴォータンが神々の運命を聞き出そうと智の女神エルダを地下から呼び起こす。エルダはヴォータンの身勝手な考えに反発している。かつてヴォータンは神々の世界を守ろうと、エルダに九人ものワルキューレたちを産ませたおきながら、今度はヴォータンにもっとも忠実だったブリュンヒルデを罰しているというのである。ヴォータンはエルダの反発に当惑しながらも、ジークフリートが指輪を手に入れたのだから、彼がブリュンヒルデを目覚めさせ、世界を救うだろうと言いながらも、不安のうちに再びエルダを地下の国に返し、眠らせる。

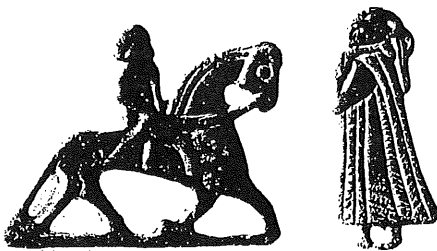
(続く)



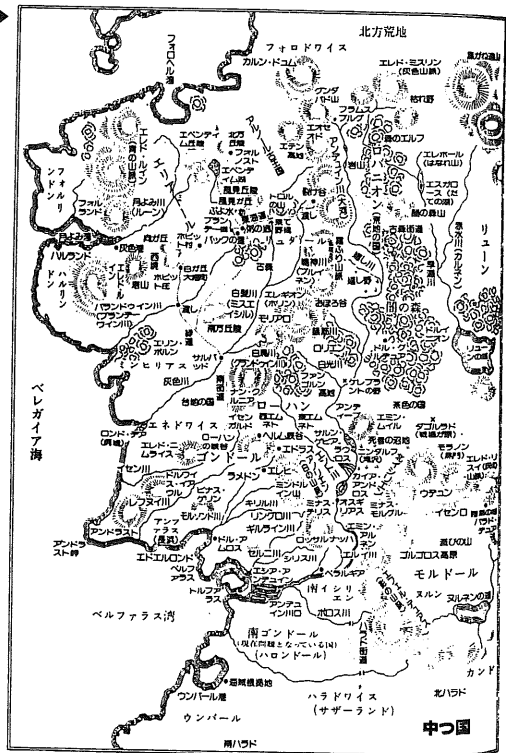
文献 6 ▶

文献 3 ◀

文献 5 ▼



戦士を迎えるワルキューリ



参考文献

- 1) 『リヒャルト・ワグナーの芸術』 渡辺護 著 (音楽之友社)
- 2) 『ニーベルングの指環-対訳台本』 天野晶吉 訳 モチーフ分析川島通雅 (新書館)
- 3) 『ニーベルングの指環・ワルキューレ』 高橋廉也 訳 (新書館)
- 4) 『トールキンの世界』 リン・カーター著 荒俣宏 訳 (晶文社)
- 5) 『ギリシャ神話 (付北欧神話)』 山室静 著 (社会思想社, 教養文庫)
- 6) 『架空地名大事典』 アルベルト・マンゲル著 高橋廉也 訳 (講談社)

The Musikdrama of R.Wagner and the Philosophy in the 19th Century

Haruo OHKUMA

College of the Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1997)

In the Musikdrama of R. Wagner we see many problems of the philosophy in the 19th century and the legends and myths in northern Europe. In this essay, I tried to analyse his drama, "Der Ring des Nibelungen" to show how the drama is influenced by the legends and myths, and is based on the philosophy in the 19th century.

First of all, it is necessary to know the story of the drama, so we relate it in outline, and then point out the similarities with the legends of northern Europe.

"Der Ring des Nieberungen" consists of four parts i.e. (i) Rheingold (ii) Walküre, (iii) Siegfried, (iv) Götterdämmerung. In the first part, "Rheingold", we see "the Ring" made by the man of Nibelung. The ring is made from the gold of the Rhein, and it has magical evil power. In the second part, "Walküre", the king of gods – Wotan – wants to save the world from ruin, and Walküre, the warrior and daughter of Wotan, Sieglinde, a daughter of Wotan, and Siegmund, the Hero and son of Wotan, they appear on the stage and a tragedy begins.